【念仏に満ちたふるさとの村】

折谷　吉治　氏

諏訪町内会　佐平あらい　出身
神奈川県　三浦郡葉山町　在住

本文：同人誌【連続無窮】第2号、2007年3月発行
(発行人:阿満　利麿)から転載したものです。)
写真：正覚寺より提供いただきました。

はじめに

最近、私はお風呂の湯船につかると時折、「ナンマンダブツ、ナンマンダブツ、ナンマン・・・・・」というように、念仏が自然に口をついて出てくるようになりました。これはどうも、60歳近くになり、かつて念仏に満ちた村に生まれ育ったことの影響が出てきたからではないかと思っています。

ふるさとの村

私のふるさとは、富山県の東端、新潟県との県境に近い朝日町の「笹川」という村です。
北アルプスが北東に向かって立山、剱岳、白馬岳などと連なって、日本海に落ちる直前の小さな谷間にあります。村は四方が山に囲まれ、幅が数百メートル、長さが4～5キロほどです。村の中心をイワナも釣れる川が流れ、この川が日本海に注ぐところだけが、村の小さな出口になっています。このように、山と川があり、海にも近い、いわば「箱庭」のようなところです。

村には当時200戸ほどの家があり、小学校（廃校になりました）をはじめ、神社と真宗大谷派のお寺が二つありました。お寺が二つといっても、「大寺（おおてら）」と「小寺（こでら）」ということで、小寺は大寺の前にあって、普通の家のような感じでした。

村人の念仏

私の念仏に関する最も強烈な思い出は、母方の祖母の遺言です。祖父・祖母の中で私が知っている唯一の祖母は、我が家から歩いて20分ほどのところに住んでおり、「優しいおばあさん」を絵に描いたような人でした。小さな体に小さな顔で、いつもニコニコしており、時々、口をモグモグさせて、小さな声で「ナンマンダブツ、ナンマンダブツ」と言っておりました。

私が高校生の時、祖母が82歳で、2週間ほど床についただけで逝ってしまい、私は見舞うこともできませんでした。亡くなったことを知らせに我が家に戻ってきた母が、『念仏を大事にせいよ』とだけ、言ってかっせたわ（言っていかれたよ）」と、ぽつりと言いました。

それを聞いて私は「念仏というのは、遺言に言うほど大切なことなのか？」という、疑問とも驚きともいえない、とても不思議な気持ちがしました。というのも、その当時の村の大人たちは、ありとあらゆる所で、ごく自然に念仏を唱えていたからです。

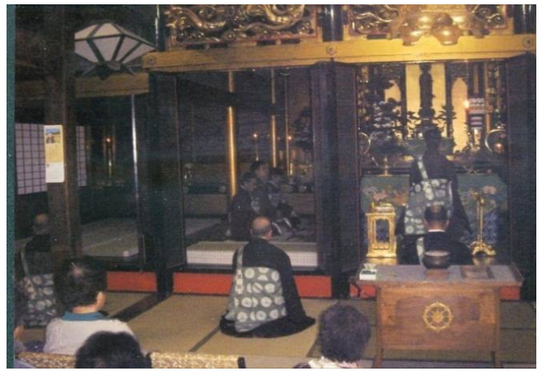
それらの記憶をたどってみますと、まず共同風呂でのおじいさん達の念仏が思い出されます。私の子供の頃には、各自の家に風呂はなく、村に銭湯のような大きな共同風呂がありました。この風呂につかるときに、おじいさん達は結構、大きな声で念仏を口にしておりました。

また、近所の大柄なおじいさんで、道を歩きながら「ナンマン！、ナンマン！、ナンマン！」と叫ぶように念仏を唱え、その声が家の中までもはっきり聞こえる人のいたことも思い出されます。この人に比べると圧倒的に小さな声ですが、私の父や母も毎晩お勤めをする仏壇の前ではもちろん、家の中を歩きながらや寝床に入る時、起きる時など、いつでも、ごく自然に念仏を唱えており、私はそれを聞くともなしに聞いて育ちました。

村の仏事と念仏

さらに、私は小さい頃からお寺はもちろん、一般の家庭で行われる仏事にも母に連れられてよく行きました。村にはお葬式や法事、お盆、彼岸の仏事以外にも、一年中、実にたくさんの仏事がありました。そこには当然のことながら、念仏が満ち満ちていました。

村の仏事のうち、お寺での最も大きな仏事は11月に行われる「報恩講（ほんこさま＝村での呼び方）」でした。ほとんど村中の人が集まって、会食、読経、説教が行われました。



また、村が雪で埋もれる1月、2月、3月には、各月の中で1、2週間にわたって、村の外からお寺にお坊さんを招き、午前、午後の2回、読経と説教をしてもらうとともに、夜は毎晩、一般の家庭を回って説教をしてもらう、という仏事も行われていました。

一般の家庭では、上記以外にも様々な仏事がありました。例えば、年に1回、「ご影様（ごえさま）」という村をあげての大がかりな仏事がありました。これは、乗如上人の肖像画が東本願寺から各村々を巡りながら私の村にも運ばれてきて、それを村の有志の家の床の間に掛け、その家に村の人が集まって、会食、読経を行うという仏事です。この仏事は明治時代、門徒による東本願寺の再建協力に対する東本願寺からのお礼として始まったそうです。娘時代の祖母も、大きな材木を引くために使う「毛綱（けづな）」を作る材料として、長い髪の毛を切って提供したそうです。

また、お寺とは別の報恩講が何軒かの有志の家でも、会食、読経、説教という大がかりな形でありました。お坊さんを招いた読経のみの報恩講は、ほとんどの家でやっていました。このほか、「太子講（たいしこう）」などという仏事も、年に数回ありました。これは、大工さんなど職人の家に聖徳太子の肖像画とお坊さんを招いて、読経とお説教をしてもらうという仏事です。

このような様々な仏事で大人たちは、ごく自然に念仏を唱えていました。その中で、私がとくに印象深く覚えているのは、お寺や一般家庭でのお坊さんの説教の最中に、聴いている人たちが一斉に念仏を唱えだすことが何度もあったことです。今から思うと、それは説教に共感して、思わず念仏が口をついて出ていたのではないかと思います。

阿弥陀様のいる村

このように念仏に満ちたふるさとの村は、思い出の中にあるからかもしれませんが、今の私から見ると、四季折々の自然の美しさとともに、まさに「桃源郷」のように思えてきます。もちろん、村人の生活は厳しく、悩みや苦しみもたくさんあったと思います。しかし、念仏という共通の信仰をもちつつ、一村一家のような生活をすることのすばらしさは、ふるさとを遠く離れてしまった今日この頃、しみじみと私の心に響いてきます。

この村で生まれ育ち、この村から出たことのない典型的な村人であった父と母が、雪の中をお寺での説教から帰ってきて、いろり端で「18願はどうの、19願がこうの」と議論していました。

それを黙って聞きながら、「難しいことを話しているなあ」と感心したのは、中学生か高校生の頃でした。それが、自力から他力への信心の道筋を説く「三願転入」についての問答だったことがわかったのは、父母ともに亡くなった後でした。

また、私が大学生の時、父が検査入院し、付き添っていた際に、父から「妙好人（みょうこうにん）の話を読んでみたい」と言われ、仏教専門の本屋さんで見付けて父に渡しました。しかし、「妙好人」とは真宗の在家信者で信心を得た人のことであるとわかったのも、父が妙好人のようになりたいと願っていたのかしれないと思ったのも、ずっと後のことでした。

検査の結果、肺癌で手の施しようがないということになり、父を家に連れ帰りました。

父が亡くなる直前に、息苦しそうに喘ぐ耳元で、母は「もうすぐ、阿弥陀様がお迎えにいらっしゃるからね」と繰り返し、繰り返し、一生懸命に言っていました。それを聞きながら、母が 「どこまで本気で言っているのだろうかなあ？」という疑問を持ちましたが、母には聞かずじまいになってしまいました。

最近、阿満利麿先生の著書（本誌創刊号や『法然を読む』など）で、「人は不条理を納得できる物語を求める」、「物語としての阿弥陀仏は存在する」、「阿弥陀仏は存在するから信じるのではなく、信じるから存在する」といった教えを知り、父や母にとつて阿弥陀様は念仏とともに、本当にいたのだろうと思うようになりました。もちろん、他の村人の心の中にも、いたのだろうと思います。念仏に満ちたふるさとの村は、阿弥陀様がいた村だったのかもしれません。

おわりに

ひょんなことから、このょうなことを阿満先生に話したところ、本誌に書いてみるように勧められ、恥ずかしながら私事を交えて書いてみました。それで、当時のふるさとの村には、念仏の雰囲気が満ちていたことに、あらためて気付かされました。そういう村に生まれ育った自分は、つくづく幸運だったとも感じています。

ただ、私のふるさとは特別な村ではなく、この時代の日本のどこにでもあった、ごく普通の村だったと思います。そのような村にあつた念仏の雰囲気が、今では日本のどこへ行つても、ほとんどなくなってしまったようです。念仏に満ちた私のふるさとの雰囲気を書き記すことで、念仏の継承にわずかでも役立ちたいと願いつつ、本稿を書かせてもらいました。